

# エピクロス主義を再考する

佐々木 渉 (Wataru Sasaki)  
大阪大学大学院人間科学研究科

死の害に関するエピクロス主義によれば、死んでいる状態は主体にとって害ではない。現代の哲学者の多くはこれに正面から異議を唱える。すなわち、エピクロス主義者の前提の少なくとも一つは誤っており、それゆえその帰結も誤っていると主張する。なぜなら、エピクロス主義の主張を受け入れるならば、私たちはどれほど順調に人生を送り、生きる幸せを感じていたとしても、死を選ばず生き続けるための自愛に関する熟慮に基づく理由 (prudential reason) をもたないことになってしまうからである。

上記の帰結を受け入れがたいと考える哲学者の多くは、しばしば剥奪説と呼ばれる害の一般理論を支持する。剥奪説によれば、死んでいる状態の害の大きさは、もし死ななかつたならば主体が享受できたであろう生の価値の大きさに等しい。剥奪説は、一見するともっともらしい応答に思われる。しかし同説は、少なくとも害の一般理論としては、多くの問題点をもち、論争は継続中である。

これに対して、エピクロス主義の基本的な論証とその直接の帰結は受け入れつつも、私たちには生を享受し生き続ける合理的な理由があるという見解を擁護する立場が存在する。本発表では、こうした立場をエリック・オルソンの用語法に基づき、穏健なエピクロス主義 (Moderate Epicureanism) と呼ぶことにする (Olson 2013)。穏健なエピクロス主義者たちによれば、エピクロスの論証が正しいからといって、彼らが推奨する死に対する態度まで受け入れる必要はないという (Hershenov 2007, Smuts 2012 など)。

しかしながら、こうした穏健なエピクロス主義者の見解は、剥奪説に対する適切な応答にはなっていないという批判がある。トラヴィス・ティーママンによれば、エピクロス主義は穏健な形で主張される限り、剥奪説と実質的な主張は変わらず、その違いはせいぜい言葉上の論争 (verbal disputes) に過ぎないという (Timmerman 2019)。

本発表では、ティーママンによる上記の批判を検討し、穏健なエピクロス主義の立場の意義を再考する。私の見解では、ティーママンの指摘する通り、死の悪さの特定の問いに関しては、穏健なエピクロス主義と剥奪説には言葉上の論争としての違いしかない。しかしこのことはむしろ、穏健なエピクロス主義ではなく剥奪説にとって問題となる。すなわち、エピクロス主義と剥奪説の論争全体を見たとき、困難な前提をより多く抱えているのは剥奪説の方であり、両者の主張に実質上の差異がないのならば、私たちは穏健なエピクロス主義の方をとるべきである。

## 参考文献

- Hershenov, D. B. (2007) "A More Palatable Epicureanism" *American Philosophical Quarterly* 44 (2):171 - 180
- Olson, E. T. (2013) "The Epicurean View of Death" *The Journal of Ethics* 17 (1-2):65-78.
- Smuts, A. (2012) "Less good but not bad: In defense of epicureanism about death" *Pacific Philosophical Quarterly* 93 (2):197-227
- Timmerman, T. (2019) "A dilemma for Epicureanism" *Philosophical Studies* 176 (1):241-257